

中古語における複合辞 「にまかせて」について

辻 本 桜 介

1. はじめに

近現代語の特徴の一つとして複合辞の種類が多いという点が挙げられることがあるが⁽¹⁾、各時代に何種類ほどの複合辞があるのかは、実のところよく分かっていない。小田（2015, 2022）で掲出されるものを見る限り、複合辞の種類は古代において既に豊富である。近世以前においても、各種の複合辞が当時の複雑な文法体系を形作っていたと見るべきであろう。とはいえ、歴史的観点から複合辞の成立過程を考えるならば、古代には未だ発達段階の初期にあって後世に複合辞としての独自の働き方を強めていくものも少なくないはずである。たとえば次に示す「にまかせて」は、そうしたケースに該当すると思われる。

(1) 今よりは、なほ口に任せて物なのたまひそ。（落窪・四・300）

(2) 船の行くにまかせて、海に漂ひて、五百日といふ辰の時ばかりに、
海のなかに、はつかに山見ゆ。（竹取・32）

これらの「にまかせて」は本動詞⁽²⁾「まかす」の意味がかなり残っているように感じられ、複合辞として認定することそれ自体が重要な論点となるが、

(1) たとえば山崎・藤田（2001: 2）は「複合辞的形式の発達は、近・現代日本語の文法の一つの特徴的事実と考えられるものだ」としている。

(2) 複合辞の構成要素となった動詞に対し、自立語相当で働く動詞を本稿では本動詞と呼ぶ。

3節で示すように使用頻度が相当に高い形であることからすれば、独自の意味・用法を確立させていたものと想像される。本稿では、このような中古語の「にまかせて」という形を取り上げ、これが複合辞であることを示すと同時に、その独自の意味合いについて考えてみたい。

議論に先立ち、本稿で使う用語等を簡単に整理しておく。

(1) (2) のように「**X** にまかせて+述語句」という形が **X** の動きを妨げずそのままのことで述語句の動作が引き起こされる、という意味で解される時、こうした「**X** にまかせて+述語句」を複合辞用法の文型と呼ぶことにする。この文型において、**X** の動きと述語句の動きは時間的に同時に起こるものと解される。以下で言及する「にまかせて」は、基本的にこうした複合辞用法の文型で用いられるものを指すものとする。なお本動詞「まかす」は下二段活用のもを指し、「水を引く」意のものは含めないものとする。

2. 複合辞と認定する方法

ある複合辞の意味・用法を記述するに当たっては、まずその複合辞が確かに複合辞であるということを確認する作業が最初になされなければならない。構成要素の本来の意味が直観によって十分に感じ取れてしまうような場合は特にそれが重要であり、その作業の過程で当該の複合辞が持つ意味・用法の記述もある程度進めることができる。本節では、内省の効かない古代語において可能な方法を松木（1990）・藤田（2019）に拠りながら考えたい。

松木（1990: 35）は、動詞を含む形の語列を複合辞と認定する際の基準として、次の3点を挙げている。

- I 形式的にも意味的にも辞的な機能を果たしていること
- II 中心となる「詞」は実質の意味が薄れ、形式的・関係構成的に機能していること
- III IIの語に他の辞的な要素等が結合して一形式を構成する場合、その要素の持つ意味がIIの語に単に付加されたものではなく、形式全体として独

自の意味が生じていること

これらは現代語における複合辞の認定に際しては一定の有効性を持つとは思われる。ただ、Ⅰの「意味的に辞的」、Ⅱの「実質の意味が薄れ」、Ⅲの「独自の意味が生じている」に見られるように、意味的観点が重視されている。意味が辞的かどうか、あるいは実質の意味がどれほど薄れていて、どれほど独自の意味が育っているのかといったことは、用例を一読するだけでは判定できない場合もあろうから、客観的な判定基準としては使いにくい。その中でⅠの、形式的に「辞」と見做せるようなものかどうかという観点は、古代語の用例の観察においても有効と言える。常に前接語を伴うようであれば付属語相当と見てよいであろうし、付属語は接続できる語に一定の制限を持つのが一般的であるから、そのような点を観察していくことも当該語句の辞的性格を見定める上で役に立つ。この観点は、「にまかせて」の観察に用いることとしたい。

以上のⅠⅡⅢに加えて、松木（1990: 37）は「複合辞性の尺度」としてさらに次の3点を挙げている。

- (i) 構成要素の緊密化の度合い
- (ii) 形式名詞・形式用言の形式化の度合い
- (iii) 形式用言の文法範疇喪失の度合い

(ii) は上記Ⅱと同様の観点である。複合辞とらしい語句の中に含まれる自立語相当の部分が意味を希薄化させているかどうかを判断するには、文意の解釈が重要となるであろうから、この観点は内省の効かない古代語の分析には向かない。一方 (i) は構成要素同士の間副詞等の成分や係助詞・副助詞が割り込めるかどうかという観点であり、客観的である。(iii) も、複合辞と目される語句の内部にある動詞等がテンス・アスペクト等の形式を分化させられるか、あるいは敬語化できるかといった点を見るもので、やはり客観的である。構成要素同士の間には何も割り込むことができず、敬語化等の操作が一切加えられないならば、複合辞としての完成度が相当に高いと判断されることになる。以上の3つの「尺度」の中では、(i) (iii) を「にまかせて」の観察に採用したい。

次に、藤田（2019: 15-37）は、動詞を含む形の複合辞に注目して、複合辞が複合辞であることの共時的な条件をいくつか示している。その中で注目したいのが、本動詞の用法との間で意味・用法が分かれているかどうか、という観点である。たとえば複合辞「に应じて」と本動詞「应じる」を比べると次のような違いがあるという。

- (3) a. その点、江口氏はプロだから、状況に应じて臨機応変に処理した。
 b.*その点、江口氏はプロだから、状況に应じた。(そして、臨機応変に処理した。)
 c. 警察は、犯人の要求に应じた。

(藤田 2019: 23 の (10 abc))

藤田はこうした点に注目しながら、複合辞と本動詞との間の意味・用法の分化が、端的には二格等の部分に取る名詞の意味内容の違いとして現れるとする (p.23)。先に見た松木 (1990) のⅡ・Ⅲ・(ii) は、文意の解釈を客観的に行えないところに問題点があったが、藤田の示す方法に従えば、「に」の承ける語彙を本動詞と複合辞とで比べ、違いを見出せば、それは本動詞と複合辞とで意味の違いが生じていることの裏付けになりうるということである。この方法は以下の「にまかせて」の分析に用いたい。

本稿で中古語の「にまかせて」を複合辞と認定し分析するのに用いる点を改めて並べれば、次の通りである。

- ①必ず前接語を伴い、前接語の種類には何らかの制限があること (松木 1990 のⅠを若干変更)
- ②当該語句 (「にまかせて」) の内部に副詞や助詞などが割り込まないこと (松木 1990 の (i))
- ③当該語句 (「にまかせて」) の内部にある用言 (「まかせ」) が各種の文法範疇を喪失していること (松木 1990 の (iii))
- ④「に」の前接語が本動詞 (「にまかす」) の場合と異なること (藤田 2019)

3. 分析対象

田中（2010: 65）が現代語で使われる「足にまかせて」「筆にまかせて」「力にまかせて」「酔いにまかせて」などを慣用的な副詞句としているように、現代語の「にまかせて」は複合辞化がかなり進んで、前接語の種類にまで強い制限が働くようになってきているものと見られる。2節の終わりに示した①～④の全てを観察することができる。

(4) 私は酔いにまかせて暴れた。

(5) ?私は酔っていることにまかせて暴れた。

(6) ?私は酔いにまかせて暴れたが、怒りにまかせて暴れたわけではない。

(7) *先生は酔いにお任せなさって暴れました。

(4) のように基本的に名詞に付くようだが、(5) のようにやや付きにくい名詞句もあり、無論、何にも後接せずに文頭に現れることはない。したがって①が認められる。(6) のように助詞等を割り込ませると不自然になることから、②が認められる。(7) のように尊敬語形に変えると不自然になることなどからは、③が認められる。そして、現代語の本動詞「任せる」が取る二格名詞が大抵の場合は次のように人物を表すものとなることから見て、④も認められるだろう。

(8) 太郎が犬の世話を花子に任せた。

以上によって、現代語における複合辞「にまかせて」の存在が確かめられたことになる。本稿の冒頭で見た中古語の(1)(2)も、現代語の(4)などと同様に複合辞用法の文型で用いられるものであるから、やはり複合辞として働いているものであろうと推定され、どういった意味を持つかが問題となるだろう。

小田（2015: 522）は中古語に「物事に意志的にかかわらず、進むがままにする」という意味の複合辞として「にまかせて」があるとする。

- (9) 北の方、このほどを見棄てて知らざらんもひがみたらむと思ひ念じて、ただするままにまかせて見るたり。(源氏・東屋・6-41, 小田 2015: 522 の⑫に相当)

5節(表2)で示すが、この用例のように「まま」に接するものは稀であり、また直後に「見る」が来る「にまかせて見る」という形は、稲田(2004)に示されるように慣用的に固着しひとまとまりになっている。あらためて「にまかせて」の一般的な用例の現れ方を観察しなければならない。

4. 調査結果の概要

本節では調査の概要を示す。

まず、本稿末に示す「調査資料」を対象として「まかす」の用例を網羅的に抽出した。その中で、複合辞用法の文型で用いられている用例を複合辞の「にまかせて」と見做した。また3節の終わりに示したように、「見る」が共起する「まかせて見る」という形は慣用的な連語であり、この形で特殊な意味合いを帯びている可能性があるので別に計上した⁽³⁾。それ以外の用例は本動詞と見做した。なお、抽出できた用例のうち、複数の重複歌に跨って現れているのは1例として計上し、掛詞⁽⁴⁾の用例も除外した。

表1は、得られた用例の分布状況である。本動詞「まかす」247例に対し、複合辞と思われる「にまかせて」の用例は139例となっており、決して少な

(3) 「まかせて見る」は複合動詞的なものと見るべきかもしれない。

(i) もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり(古今・859)

現代語でも「降って湧く」「取ってつける」「取って返す」「掃いて捨てる」「切って捨てる」など、テ形を前項とした複合動詞と見做せるものは少なくない。こうした構造の早い例と考えると良いのではないだろうか。

(4) 次の(i)の「まかせ」は「任せ」の意で取れるが、「(種を)蒔かせ」の意にも取れるような形にはめ込まれている。他の一般的な「まかす」の用例と同列に扱うべきか、検討の余地があろう。

(i) わすれぐさたねを心にまかせてやわがためにしも人のしけらむ(相模集・568)

くない。作品によっては「にまかせて」の方が
多いもの（落窪物語、源氏物語、夜の寝覚）も
ある。「まかす」も「にまかせて」も、中古一
帯において広く使用されたことが知られよう。

5. 用例分析

本節では、複合辞用法の文型で用いられる中
古語の「にまかせて」139例を、2節の終わり
に示した①～③の観点で観察し、複合辞化して
いることを示す。

5.1 ①前接語の品詞的特徴

「にまかせて」は格助詞「に」を伴う形であ
る以上、単独で自立語のように（例えば文頭
に）現れるような用例は無論見られない。その
点で、助詞相当の辞的形式であることの条件は
満たされている。この大前提に立って、前接語
の品詞的特徴を確認したい。

表2では前接語の状況を示した。名詞が大
多数を占めるものの、活用語に付く用例も若干
見出せる。したがって格助詞的用法だけでなく
接続助詞的な用法を備えていることになる。た
だ「にまかせて」によって形成される節の構造
は単純である。

- (10) …世の中いとところせく思ひなられ
て、なほ いたうき身なりけりと、
ただ、消えせぬほどはあるにまかせ

表1 用例の分布

	複合辞「にまかせて」	本動詞「まかす」	連語「まかせて見る」
竹取物語	2	1	
土佐日記		1	
平中物語	1		
落窪物語	5	1	
蜻蛉日記		4	1
大和物語	1	2	
宇津保物語	10	16	3
枕草子	5	4	
源氏物語	48	38	2
紫式部日記		3	
夜の寝覚	10	4	2
浜松中納言物語	6	12	1
更級日記	1	1	
和泉式部日記	1		
狭衣物語	10	21	1
堤中納言物語	1		
栄花物語	9	18	
古今和歌集		3	1
私家集	25	94	25
私撰集	2	14	2
歌合類	2	10	2
合計	139	247	40

表2 「にまかせて」の前接語

名詞	120
動詞	14
形容詞	1
助動詞（「む」）	3
助詞（「まま」）	1

ておいらかならんと思ひはてて、…（源氏・宿木・5-433）

- (11) 人のよはへんにまかせてありぬべしはなをばえこそおもひかへさね
（為頼集・21）
- (12) …、げにいみじき山人の女といふとも、くるしかるべきやうもなく、
心のひくにまかせても、もてなし迎へよせてむかし。（寢覚・一・
69）
- (13) 秋のよは水こそことにまさるらし月と露とのもるにまかせて（公任
集・107）

一般化して示せば「(主語名詞+の+) 述語用言 (+助動詞)+にまかせて」となる。主語名詞が現れる場合は必ず助詞「の」を伴うようであるから、「にまかせて」が承ける節全体を体言相当と見るべきだろう。その意味で格助詞的用法の一部にとどまっていると見てよいと思われる。

5.2 ② 「にまかせて」内部に割り込む語の有無

次に、「にまかせて」を構成する要素が緊密に結びついていることも確認できる。すなわち、「に+助詞+まかせて」や「に+成分+まかせて」のような形で「にまかせて」の中に他の要素が割り込んだ用例はほぼ見出せないのである。外形上は「にまかせて」の内部に助詞が割り込んだように見える次のような用例が1例のみ得られたが、これは「風が（花を）吹き散らすのを放っておいて」のように解され、「まかす」は本動詞的に用いられたものと解される。

- (14) 風にのみまかせて人もしまねば花ふるさとなるにやあるらん
（斎宮女御集・255）

なお、接続助詞「て」を欠いた「にまかせ」という形も見出せない。これも形態的な固着を示しているとも言えようが、複合辞用法の文型では後続する述語句を様態副詞的に修飾する「て」の働きが重要なために、「て」を欠いた形を作りにくいのではないと思われる。

5.3 ③「まかす」に関する各種文法範疇の喪失

3点目として、「にまかせて」に含まれる「まかす」が各種の文法範疇を喪失していることもほぼ確認できる。例外となるのは次の1例のみであった。

(15) 院の御有様、かくてしも御心にまかせさせ給ひて、所々御覧じ、御物詣など、安らかにめでたき御有様なり。(栄花・四十・下-540)

もし「まかす」が本動詞として機能しているなら、待遇価値の高い人物を主体とする文ではこうした形の用例が一定量得られることが期待されるが、次のように尊敬語が用いられる環境においてもほぼ全ての用例が「にまかせて」という形で現れる。

(16) 御宿世にまかせて、思しよりねかし。(源氏・東屋・6-35)

(17) 御心にまかせてうち遊びておはするを、世の中には、わづらはしきことどもやうやう言ひ出づる人々あるべし。(源氏・賢木・2-140)

「にまかせて」の内部に含まれる「まかす」は各種の文法範疇を持っておらず、動詞的な働きを喪失していることが分かる。

以上、本節では複合辞用法の文型で用いられる「にまかせて」が複合辞と認められるべきものであることを確認した。

6 意味特徴の記述

「にまかせて」が複合辞であることが確認されたとなれば、次に問題となるのは、本動詞の用法とどのように意味が異なっているかである。中古語の場合、現代語よりも本動詞「まかす」の用法が少し広がったようなので、複合辞の「にまかせて」との意味の差が見えにくい。

(18) a. 宿世などいふらんものは目に見えぬわざにて、親の心にまかせがたし。(源氏・若菜下・4-264)

b.? 私の運命は親の心には任せられない。

(19) a. 大空をおほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ(寛平御時后宮歌合・24)

b.? 春に咲く花を、風に任せるつもりはない。

現代語において、(18 b) (19 b) は非文とまでは言えないが自然な日常会話では現れにくい形であろう。現代語の本動詞「まかせる」は二格に有情物を取るのが普通ではないかと思われるが、中古語では(18 a) (19 a) のように無情物を二格に取る用例が少なからずあるようで、複合辞用法の文型と解される次のような「にまかせて」と意味が近い。

(20) されど、この、いまからのものたまふ男は、上にも下にも、心にまかせてまじり歩く人なれば、えまもりあふべくもあらぬほどに、くちをしきこと、あひにける。(平中・三四・517)

(21) このまより風にまかせてふる雪を春くるまでは花かとぞみる(貫之集・2-104)

「にまかせて」は複合辞化した形式と見るべきものだが、それならばどのような独自の意味を担っているのか。以下でその点を分析してみよう。

6.1 「に」の前接名詞一本動詞との比較

複合辞としての独自の意味合いを確認するには、2 節の終わりに示したように、藤田(2019)による④の観点を用いて、「に」の受ける要素を本動詞「まかす」の場合と丁寧に比較すればよい。

表 3 では、本動詞「まかす」と共起する二格名詞の状況を示した。全 247 例のうち活用語に接続する 5 例と文意の難解な 11 例を除いた 231 例を分類してある。下段の「φ (同一節中に生起せず)」は、省略された二格成分を文脈から読み取って補完できたものである。二格名詞を大きく有情物と無情物に分類したのは、後の「にまかせて」との比較においてその分類が意味を持つためである。

さて、二格に有情物を取る「君にまかす」「神にまかす」などの形が一定量見られるが、こうした用例は現代語の「まかせる」と同様に捉えられる。

(22) かのみゆるたづのむら鳥君にこそおのがよはひをまかすべらなれ(貫之集・195)

表3 本動詞「まかす」と共起する二格名詞 (231例)

有情物		無情物					
君	10	精神 (95例)		文主体の意図と独立に動く事物 (64例)			
神	4						
人	5	心	75	風	24		
我	5	御心	11	苗代水	4		
親	2	心ひとつ	4	空	4		
大殿	2	あながちなりし心のひく方, (御心ざしの) 深さ, 御心一つ, 心・身, 心地 (各1例)	5	桜	2		
大将殿	2			露	2		
天道	2			(春の) 日	2		
かしこ, きんぢ, ここ (=私), ただすの神, 一人, 院, 我ひとり, 宮, 上, 神仏, 水神, 中納言, 殿, 殿など, 妹 (各1例)	15			文主体の身体の一部 (2例)	1	嵐, (松の) 江, (人の) 思ひ, (駒の) 歩み, 御仲ども, 今日, 小鳥, 駒, 宿世, (風の) 調べ, 花, 鶴, 春, 水の面, 掟, (風の) 行く手 (各1例)	17
φ (同一節中に生起せず)	23	手	1	φ (同一節中に生起せず)	9		
合計	70	合計		161			

(23) 時々物見などに出でて見るに, この君ただならず見ゆる君なり。我
に任せ給へれかし。(栄花・三・下-109)

一方, 無情物を二格に取る「心にまかす」「風にまかす」などの形が全体の7割近くを占めている⁽⁵⁾。これは現代語と異なる分布と思われ, 注意される。全体の傾向としては, 文主体の精神を表すものと文主体の意図と独立に動く事物とに二分され, 後者は自然物が大半を占め, 特に天候を表すもの(風・空・日・嵐など)が目立つ。

(5) 木村 (1987: 14) は古代語の「まかす」は「心にまかす」という形が用例の大半を占めるとしているが, 247例のうち75例であるから「大半」とまでは言えない。一方, 志波 (2018: 67) は平安時代語の「まかす」について「二格に事柄名詞を取る例が多く見られ, 現代語に見られる「彼にまかせる」のような人名詞を取る例はそれほど多くない。」としている。二格に現れる語彙を「事柄名詞」と言うべきかは検討の余地があるように思うが, この観察は本稿の表3からすれば大筋で当たっている。

- (24) きてもみる人しなければわがやどのもみちはよものかぜにまかせて
(相如集・63)
- (25) あふことをなはしろ水にまかせてはこさんこさじは小山田のせき
(古今和歌六帖・1028)
- (26) かぎりなく、心ざしをば思ひきこえさせしかど、心ざしのままにつ
かうまつことはなくて、そらにまかせ奉るやうなりしみづからの
思ひには、さばかりの御本意をだに、かなへ奉るばかり。(寢覚・
五・330)

次に表4では、複合辞「にまかせて」の前接名詞の状況を示した。全139例のうち活用語に付く18例と「まま」に後接する1例を除いた120例を分類してある。本動詞「まかす」の二格名詞と最も大きく異なるのは、有情物を表すものが全く無い点である。

用例の大半(79例)は文主体の精神を表す名詞に付くが、その殆どは「(御)心にまかせて」という慣用的な形であり、主体の制御から解放された心理(希望や意図)を表すものと解される。

- (27) 「我爾時為現清浄光明身」など、心に任せて読みすまし給へるを、聞く人皆、しみ入りて悲しくいみじきに、さばかりの荒々しき修行者どもも涙を流したり。(狭衣・二・210)
- (28) 心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬ

表4 中古語の「にまかせて」の前接名詞(120例)

文主体の精神		文主体の身体の一部		文主体の意図と独立に動く事物	
心	60	筆	7	(御)宿世	8
御心	9	口	4	駒	7
こころざし	3	声, 足, 水茎の跡(筆跡) (各1例)	3	風	5
(心の)すさび	2			影, 川水, 種, 月, 年, 道理, 波(各1例)	7
思ひ思ひ, (心の)乱れ, 御心ひとつ, 心々, 心地 (各1例)	5				
合計	79			合計	14

べきことなり。(源氏・葵・2-18)

表3と表4とで文主体の精神以外の事物を表す前接名詞を見比べると、若干の違いがある。すなわち「まかす」と共起する二格名詞は天候や水・植物など有生性の認められない純粋な自然物が多いのに対し、「にまかせて」の前接名詞は、純粋な無情物とは言いがたいものが上位に来ている。「筆」「口」は本来は有情物の意図で動くものであるし、「駒」も有生性のある程度認めることができよう。「宿世（＝因縁・運命）」は超自然的なもので、神意のようなものに従って決まるものだろう。この分布から、「にまかせて」を承ける述語句は〈主体の制御下でない心理（を持つように見えるもの）〉に随伴する動きを描写すると言えるのではないだろうか。

(29) …またこの紙屋の色紙の色あはひはなやかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる、見どころ限りなし。(源氏・梅枝・3-420)

(30) 世に難つけられたまはぬ大臣を、口にまかせてなおとしめたまひそ。(源氏・真木柱・3-375)

(31) 御宿世にまかせて、世にあらむかざりは見たてまつらむ。(源氏・紅梅・5-44)

(32) わがせこはこまにまかせてきにけりとききにきかする轡むしかな(和泉式部続集・243)

これらの「筆」「口」「御宿世」「こま」は、有情物とは言いがたいが、ひとりでに意図を持つように動くものと言えよう。

6.2 現代語の「にまかせて」との比較

以上によって本稿で扱う中古語の「にまかせて」の分析はほぼ終わっているのだが、最後に現代語の「にまかせて」との違いにも触れておきたい。

表5は、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』から「にまかせて」という語列を抽出し⁽⁶⁾、複合辞用法と思われるものを拾

(6) 語彙素「に」・語彙素「任せる」・語彙素「て」が並んだ語列を全て抽出した。

った結果を分類したものである⁽⁷⁾。中古語との比較のための簡単な調査であり、見落とした用例もいくらかあろうとは思われるが、大体の傾向はこれで掴めるはずである。

用例の状況を見る限り、現代語でも「にまかせて」は無情物を表す名詞に後接することが多く、その大部分は文主体の精神を表すものであるが、「怒り」「酔い」「激情」などのように〈文主体が制御できないほどの勢いを持った心的な動き〉を表すものが大部分を占める。

(33) 怒りにまかせて影法師の一人を更に殴り殺したが、その影から更に新たな影が現ると、渾身を込めて退いた。(BCCWJ/沖方丁『ばいばい, アース』)

(34) 目明しの手先の犬と呼ばれるつまらぬ男を、血気に任せて斬ったために、お尋ね者になった八郎である。(BCCWJ/早乙女貢『新選組斬人剣』)

中古語の場合、前接名詞の全体に共通して〈主体の制御下でない心理(を持つように見えるもの)〉という意味特徴を指摘できたが、現代語の場合、激しい心的な動きを表す名詞に用例が偏っており、中古語の状況からかなり変容して

表5 現代語の複合辞「にまかせて」の前接名詞 (BCCWJ) (142例)

文主体が制御できない精神			文主体の精神・身体の一部		文主体の意図と独立に動く事物				
怒り	32	食欲	3	筆	9	流れ	2		
酔い	15	衝動	2	力	7	成り行き	2		
勢い	15	欲望	2	心	4	遠心力、動き、風、経過、重力、消化、波、揺らぎ(各1例)	8		
感情	9	うねり、客気、憎しみ、ノリ(各1例)	4	足	2				
若さ	6			気分	2				
激情	4			軽口、感覚、気持ち、淋しさ、想像、退屈、体力、直感(各1例)	8				
血気	3								
興	3								
合計				98	合計			32	合計

(7) 「金にまかせて」のように誤用に由来すると思われるものは意味も出自も異なるので除外した。

いることが分かる。BCCWJ によって「任せる」（語彙素）を検索すると 3645 例得られるが、その中で複合辞の「にまかせて」は 140 例程度であり、本動詞と比べた場合の使用頻度は中古語よりも遥かに低い。意味領域が狭まり、使途が限られるようになったためであろう。

7. ま と め

本稿の調査と分析の結果を要約すれば次の通りである。

1. 中古語において「X にまかせて+述語句」という文型が、X の動きを妨げずそのままにすることで述語句の動作が引き起こされる、という意味で解される場合には、「にまかせて」は複合辞化している。その根拠として、①名詞か名詞節に後接してのみ現れること (5.1)、②「にまかせて」の内部に助詞等が割り込まないこと (5.2)、③「にまかせて」に含まれる「まかす」が各種の文法範疇を喪失していること (5.3)、の 3 点が挙げられる。
2. 中古語の複合辞「にまかせて」は、〈主体の制御下でない心理（を持つように見えるもの）〉に随伴する動きを描写するための形式である。その根拠は、本動詞「まかす」が有情物や純粋な無情物を二格に取るのに対し、「にまかせて」の前接名詞は「(主体の制御下に無い) 心」「筆」「口」「駒」など、主体の制御から解放された心理か、そうした心理を持つかのようにひとりでに動く事物を表すものに偏ることである (6.1)。
3. 現代語の「にまかせて」は「怒り」「酔い」「勢い」など〈文主体が制御できないほどの勢いを持った心的な動き〉を表す名詞に付く傾向が著しく、中古語の状況から大きく変容している (6.2)。

中古語の「にまかせて」は複合辞化してはいるものの、構成要素の意味の合計から大きく変容していない段階にある。しかし一定量の用例が得られるのは、それ相応の価値を持った形式だったということであろう。

調査資料

(用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を [] に示した。)

【和文】○竹取物語・伊勢物語・土佐日記・平中物語・落窪物語・蜻蛉日記・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・古今和歌集……新編日本古典文学全集 ○後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集……正保版本「二十一代集」○浜松中納言物語・夜の寢覚・狭衣物語・栄花物語……日本古典文学大系 ○宇津保物語……室城秀之(1995)『うつほ物語 全 改訂版』おうふう ○私家集・私撰集・歌合類(1086年までの成立と目されるもの)……新編国歌大観

※用例の検索に際して用いた手段は以下の通り。

- ・新編日本古典文学全集・正保版本「二十一代集」の用例検索には国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(中納言 2.6.1 データバージョン 2022.03, <https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search>)を利用した。
- ・日本古典文学大系所収の資料は国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』(http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi)を利用した。
- ・新編国歌大観の用例検索には(株)古典ライブラリー『日本文学 Web 図書館』(<https://www.kotenlibrary.com/download/toshokan/>)を利用した。
- ・国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』の用例検索には、中納言 2.6.0 データバージョン 2021.03 を利用した。

参考文献

- 稲田利徳(2004)「「まかせてぞみる」の系譜－隠遁的行為と措辞－」『岡山大学教育学部研究集録』126-1 pp.201-211
- 小田勝(2015)『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院
- 小田勝(2022)『実例詳解 古典文法総覧』補遺稿－連載第 109～111 回－」(<https://www.izumipb.co.jp/news/n39998.html>, 2022年9月25日参照)
- 木村紀子(1987)「古代日本語における「信ず」の成立まで」『奈良大学紀要』16 pp.1-16
- 志波彩子(2018)「近代日本語における依存構文の発達－構文はどのように発生・発達・定着するのか」『国立国語研究所論集』16 pp.51-76
- 田中寛(2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- 藤田保幸(2019)『複合助詞の研究』和泉書院
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2 pp.27-52
- 山崎誠・藤田保幸(2001)『現代語複合辞用例集』国立国語研究所

[付記] 本稿は令和4年度 JSPS 科研費（課題番号 22K00578）による成果の一部である。

——文学部助教——